

ほくと遺跡ものがたり

遺跡が語る北斗の歴史

第12回

はるかむかし、旧石器時代・縄文時代から現代に至るまで、一万有余年の間にこの北斗の地で営まれ続けた人類の歩み―当コーナーは、こうした北斗の歴史について、「遺跡」に焦点をあてて紹介します。今回は第11回に引き続き、箱館戦争にまつわる遺跡や記録について触れていきたいと思えます。今回は大野口の戦い後、箱館戦争戊辰戦線終結から己巳戦線開戦前夜までのお話、その第1回です。

前回お話ししたとおり、箱館戦争は「蝦夷地への移住・開拓」という朝廷への嘆願を求める旧幕府軍使者に対する箱館府・新政府側諸藩隊による夜襲（峠下の戦い）により勃発し、やむなく交戦状態に陥った旧幕府軍は、統率ままならない新政府側諸藩隊を一ノ渡村〜大野村村境で鎧袖一触に撃破します。これが、箱館戦争における最初の大規模戦闘である大野口の戦い（通称・意富比神社の戦い）でした。

大野口の戦いと同日の明治元（1868）年10月24日、二方面進撃の一方として七重村（※1）方面へ兵を進めた人見勝太郎・佐久間悳二らの率いる部隊約250名が同村と大川村との村界で箱館府兵・大野藩・松前藩・弘前藩・福山藩

からなる総勢約500名の兵と交戦。大野より向かった伝習隊の援兵も受け同日中に撃破し（七重口の戦い）、25日には大野口・七重口の両方面軍に加え鷲ノ木に残っていた松岡四郎次郎率いる一聯隊（約200名も七重に合流し、新政府側本拠である五稜郭進撃の準備を整えます。同じ頃、函館平野側に進んだ大鳥らと別方向、海岸沿いに部隊を進めていた土方歳三らも川汲峠に陣した新政府部隊を退け、峠を抜き上湯の川に陣を敷きます。この連戦連敗の状況を受け、箱館府知事・清水谷公考は箱館府兵と、この時同城に退避していた福山藩・松前藩兵とともに24日に五稜郭を退去し箱館港より青森へ脱出。その他の藩の士卒もこれに従って25〜27日にかけて青森へ脱出。以降、新政府は公考を総督とする「新政府軍」を再編成すべく全国から青森に精鋭を集結させ、翌年の反攻のための準備を着々と整えていくこととなります。

※1 現在の七飯町役場周辺。明治12年から一字ずつとり「七飯」となりました。こうして10月26日、旧幕府軍の士卒は空城となった五稜郭に入城します（※2）。なお、このとき五稜郭そばに建てられていた役宅には10数名の新政府側負

傷者がのこされていましたが、旧幕府軍は彼らを函館病院（1860年に創立された北海道初の病院）へと移し、治療・回復の後は青森へと送り出しています。※2 当時の五稜郭は防衛のための装備も設備も不十分なため、政庁府に過ぎませんでした。大鳥圭介は入城時に当時の状況を「五稜郭の築造未だ全備せず、有事の際には防禦の用に供しがたき」と評し、翌年3月までの間に莫大な労力を費やして防衛設備の増築工事を行っています。

成り行き上こうして函館平野部の制圧に至ったものの、あくまで榎本武揚ら旧幕府軍の目的は（天皇親政による）朝廷公認の元での蝦夷地移住・開拓であったことは第10回・11回でお話ししたとおりです。そのため松前藩とも積極的に敵対する意思があったわけではなく、先の戦中に降伏した松前藩士・桜井恕三郎に「行きがかり上戦闘に陥ったものの貴藩に殊更に恨みはなく、この上は力を合わせて蝦夷地開拓を行いたく願う」旨の書状を託し松前へ使者として帰します。しかし、松前藩はこれを拒絶するのみならず、あまつさえ桜井を処刑してしまいます。こうなってしまうのは現状の憂いを断つためには兵を動かすほかになく、10月27日に土方歳三を司令官とし、彰義隊・陸

軍隊・額兵隊・衝鋒隊からなる部隊約800人が海岸沿いに松前方面へと進撃。海軍の援護と併せ、知内村・一ノ渡（現・福島町千軒）・福島・吉岡と松前藩の抵抗を退け、11月5日には松前藩の日本拠・松前城（※3）を攻撃します。この時、守備兵は100名弱でした。※3 この頃松前藩は新築間もない厚沢部の館城に本拠を移しており、藩主・徳広は緒戦が始まった10月28日にはすでに新城へと逃れていました。

松前藩は、この箱館戦争開戦直前の8月に派閥争いを起因とするクーデターが勃発しており、これにより実権を握ったメンバーが拠ったのは当時戦闘の前提・常識でもあった洋式軍制ではなく、旧来の和式武術を主とするメンバーでした（このためか、大政奉還後にもかかわらず剣術・槍術などの使い手からなる鎗劔隊を新たに編成し藩兵の主力に据えたり、洋式軍制に係る藩校の廃校や知洋派に与する人材の粛清を行ったり、松前周辺の海防を担った沿岸砲台の大部分を廃止するなど、時代に逆行した施策が彼らのクーデター後に多く目立ちます）。こうした藩状の影響もあってか、洋式軍制に則った軽装に洋式銃といった旧幕府軍・土方隊のいでたちに対し松前藩兵

は甲冑に身を固め刀・槍・薙刀に火縄銃を手にしつづつほら貝を鳴らしながら出陣していた…という話が当時を知る古老の座談会に記録として残っており、必然松前藩兵は太刀打ちできず敗れ、城中・城外に火を放ちつつ退却します。

松前藩兵を退けた土方隊は9日まで滞陣し体制を整えます。この最中の8日、松前藩主徳広の逃れた館城のある厚沢部方面へ向けて、松岡四郎次郎率いる一聯隊200名が二股口へ江差へ抜ける間道を進撃。15日には50名の兵が守る館城を攻略します（この時の松前藩軍事方であつた僧・三上超順の奮戦ぶりは敵味方ともに語り草となっています）。

同じ頃、土方隊も江差へ向けて海岸線沿いに北進、大滝での戦闘を経て13日には江差に到達する見込みでした。が、この時旧幕府軍を思わぬ悲劇が襲います。

陸軍による松前藩制圧がほぼ落着きつつあつた11月11日、榎本武揚はなぜか「陸軍応援のため」海軍戦力の主力艦・開陽で箱館から出航、一路江差へと向かいます。当時冬ただなかの日本海は大いに荒れており、松前城攻略戦に参加した回天・蟠竜の2艦は戦後の係留ままならず箱館へときびすを返した程でした。

開陽が江差へと到着した12日も天候は大いに荒れていました。元来江差では小型の和船であれば弁天島の陰で風雨雪を

しのぐことができましたが、大型船・開陽ではそれもままならず。やむを得ず外洋に錨を2つ下ろすもその甲斐なく船は走錨を始め、蒸気機関による操船脱出を図るも間に合わず座礁、結果大破・沈没へと至ってしまったのでした（※5）。

（※5）なお、この時開陽沈没を見て土方が悔しがって叩いた「歳三嘆きの松」という逸話がありますが、これは郷土史家の創作であることがわかっています。

さらにはこの開陽を救援しようと回天・神速の2艦が向かいますがこの波瀾では何もできず、神速にいたっては波風に飲まれ開陽に続き沈没してしまいます。当時軍艦の機動力と艦砲性能からなる制海権の奪取は、戦局の鍵を握る大きな存在でした。これを不慮の事故で、しかも主力を含む2艦を同時に失つたことは、翌年の箱館戦争に戦線において旧幕府軍に大きな影を落とすこととなります。

ともあれ、陸戦においては松前藩の死者数83人（死42傷41）に対し23人（死3傷20）と圧倒し、11月19日には徳広が蝦夷地を脱出。旧幕府軍は渡島制圧を成し遂げます。が、これは翌年へと続く「時代が生まれ変わるための最後の戦い」の序章に過ぎなかつたのでした。

（郷土資料館 時田 太一郎）

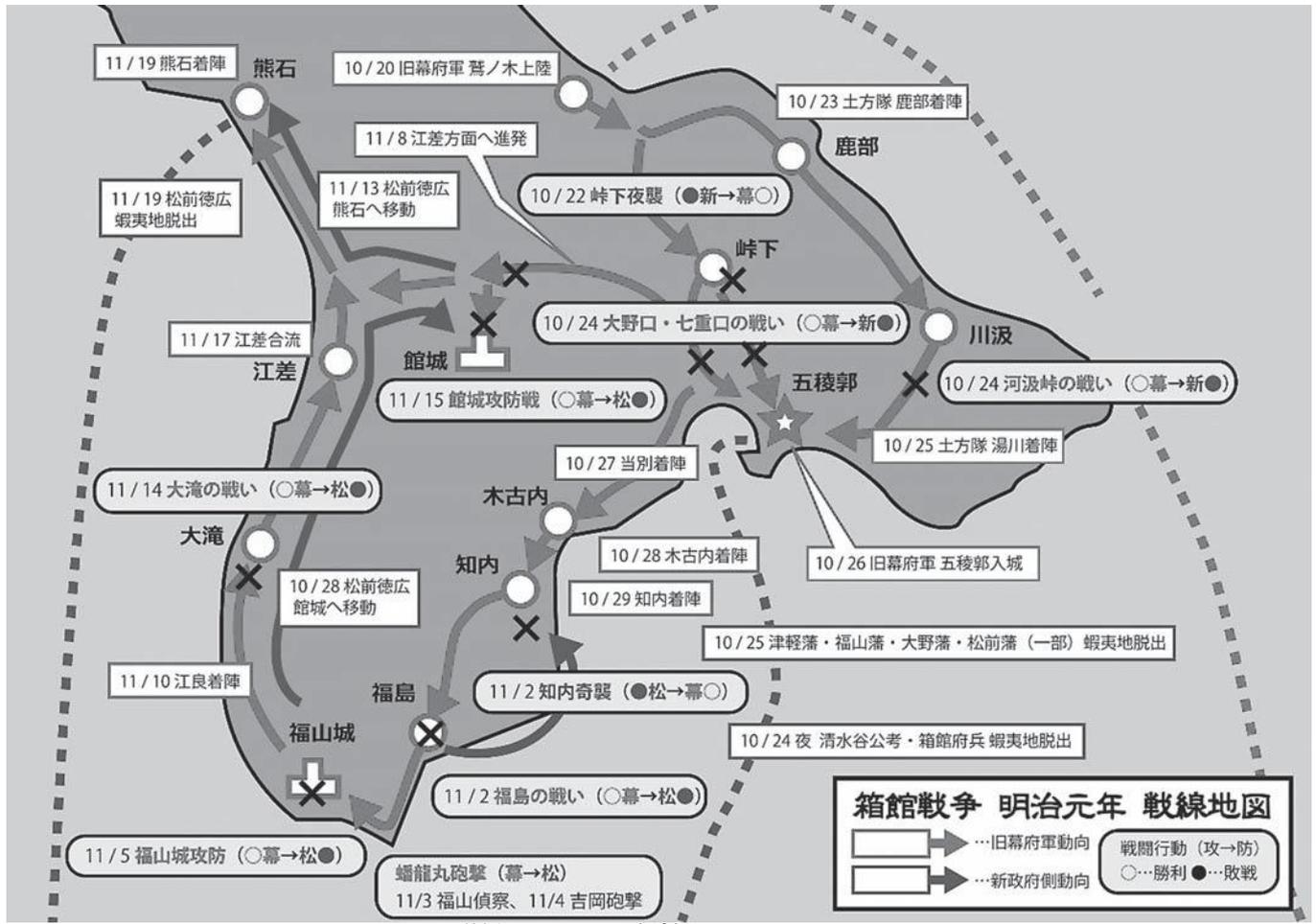


図. 箱館戦争戊辰 (明治元年戊辰) 戦線 戦線地図 (時田作成)